

『傾城水滸傳』

元となった水滸伝は、中国の明代の長編小説で、四大奇書の一つにも挙げられている。元末の施耐庵の作を、明初の羅貫中が修訂したといわれるが、詳細は不明。水滸とは水のほとりの意味で、北宋末年、宋江を首領に、群盗が山東の梁山泊にたてこもった史実にもとづく物語。百八人の豪傑が正義のためにかえって罪を犯し、やむなく梁山泊に逃げこむ過程を描く前半と、朝廷の招安を受けて官軍に編入され、遼国との戦争および江南の方臘の反乱討伐に功を立てながら、やがて豪傑たちが離散死亡していく後半とに分かれる。日本では、岡島冠山の翻訳(宝暦7年(1757)刊)以後、翻案が数多く出るなど流行し、出版界はもとより演劇や浮世絵、さらには宝飾の世界にまで及ぶ広範なものであった。本書『傾城水滸伝』は文政8年(1825)に初編が刊行された長編合巻である。『水滸伝』の豪傑108人の性別を反転させただけで、舞台を日本の鎌倉初期に移した翻案が好評を呼び、100巻50冊に及ぶ大長編となった。大変な人気のため版木が摩耗してしまい、新たに彫り直されて版を重ねた作品であったが、現在では入手困難な作品となっている。

[参考文献]

馬琴と書物：伝奇世界の底流 / 神田正行著 : 八木書店, 2011.8 913.56/かん
2011112559

“水滸伝”, 国史大辞典, JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com>, (参照 2014-10-25)

傾城水滸傳①

山城、大和、河内、和泉、摂津の五畿内に疫病が流行していた。名僧に加持祈禱をさせたが効験がなく、熊野那智の室長寺の尼無漏海に祈禱を頼むこととなり、立木の局を勅使として遣わした。しかし、無漏海は山に籠っており所在が分からない。ただ一人で一心に信心して山に分け入れば、きっと対面できるだろうと室長寺の住持に教えられ、立木の局は一人きりで山に入る事となる。段々と疲れて文句を言うと、牛にも等しい大きさの狼が突然走り出てきて、飛び掛ろうとしたので立木の局は仰向けに倒れた。その狼はしばらく局を睨んで前に立ち後ろに回り、凄まじく遠吠えして、どこへとも無く消えていった。立木の局は身体を起こして恐る恐る進んだが、いよいよ疲れて立ち休み、恨み言を言った。その時、山中が急に震動して、行く手の松の繁みから、大きなうわばみがするすると這い出し、大波が寄せるように、立木の局の頭を呑み込もうとしたので、局は再び倒れ伏した。うわばみは、長い赤い舌を出して局の額を舐め襟を舐め、しきりに毒気を吹き掛けて、どこへとも無く消えた。一刻ほど経ち、やや人心地はついたが、恐れて進もうか帰ろうか思い迷っていると、11、12歳ほどの女の子が牛を引きながらやってきた。この山の中に子供がいることをいぶかしみながらも、無漏海のことを問うと、女の子は微笑んで、自分は尼に仕える者で、尼は既に疫病を祓うため鶴に乗って京へ発ったとのことであった。立木の局は勅使の自分が着くより先に、どうして京に行くことを知ったのか怪しみながら、室長寺へ戻り、住持に恐ろしい目にあったことをうたえた。住持の尼はそれを聞き、「山中には獰猛な獣がありますが、昔から人に危害を加えることはありません。危ない目にお遭いになったのは、信心の急りを無漏海が懲らしめたのでしょう。その童女は無漏海に違いありません。かの尼は今も顔色が少しも衰えません。そのように告げられたのであれば、神変自在の通力を以って京へ赴かれたこと、何の疑いもございません。」と説いた。

傾城水滸傳②

竹世は身の丈は六尺ばかりであるが、見苦しからぬ顔容で木曾義仲の思い者巴もかくやという美人で、武芸に秀で虎を退治した功により、遠近の冠者太郎忠道の家来となった。忠道の息女小笹姫の湯治に随行している間に、姉の冢代(ふたよ)が夫の金蓮助(きれすけ)と浮気相手の西門お啓に殺されてしまう。竹世は戻ってその死を知り、姉の家を訪れた。焼香をしようと納戸へ行くと、冢代の位牌を机に据えて、小屏風が立て巡らし、香や花、灯明も上げてある。その変わり様に胸が塞がって「私が出かけている間に、お姉さまが亡くなったことは疑わしい。もし悪人に謀られて殺されたのならば、その由を夢になりとも告げたまえ。仇を討ち恨み返して、その怨恨を慰め申さん。南無阿弥陀仏」と念じつつ、しばらくして眼を開けば、冢代の面影が影の如くに現れつつ、煙のように消え失せた。竹世は驚き「姉の亡き魂がここに姿を現したが、言葉を交わす事は出来なかった。大方は察しがついた」と殺害の証拠を調べ上げ、訴えてだが、取り上げてはもらえなかった。領主が正せないのならば、自らが正そうと、金蓮助とお啓を討ち果たした。

『水滸伝』での武松説話にあたるエピソードである。景陽岡での虎退治で名をあげた武松が陽穀県に住む実兄武大を訪れ、しばらく逗留する。兄嫁潘金蓮は容貌の醜い夫を嫌い武松に言い寄るが拒絶され、武松は兄の家を出て都に出張する。その間、潘金蓮は隣家の王婆の手引きで金持ちの薬屋西門慶と密通し、それが発覚するや王婆と共謀して夫を毒殺する。帰任した武松はこれを知って2人を告訴するが、西門慶が裁判担当の役人たちに賄賂を贈ったため告訴は取り上げられず、憤慨した武松は金蓮と西門慶を殺し、自首する。結局武松は流刑となり、王婆は死刑となる。